

日本の医療の在り方を根源から問いただす

気魄(きはく)の医師に会えた。

「かぶれとマダニと急性肝炎」 匿名希望 71歳

2017年2月25日

病気知らず、医者知らず、健康体だけが自慢で生きてきた。数年前、山仕事をしていてハゼの樹に触れ酷くかぶれた。薬漬けにされるのを嫌がる家内が、「ここしかない！」と探してくれたのが松本医院だった。松本先生に「なんや、こんなもん、じきに治る。1週間でバイバイや。」と言われ、「口の悪い、えらい自信家の医者やなあ。」と思った。出してもらった赤い塗り薬と漢方薬を手に、帰りの電車に乗った。2週間が経ち、漢方薬が切れた頃、あれほど酷かったかぶれがひいた。

「やっぱり松本医院へ行って良かったでしょう。ステロイドを使われなくて良かったでしょう。」治った本人より家内の方が喜んだ。そして再び、病気知らず、医者知らず、松本医院すらも忘れかけていた頃、今度は山遊びをしていてマダニにやられた。困った時の松本医院。「またこんなことで行ったら、ボロカスに言われるやろなあ。」と思いつつ出かけた。「何？マダニ？お前は、前も何かにかぶれたとか言うて来てたなあ。何やってんのや？死ねへん、大丈夫や！」簡単な問診が済んだ。「あの医者が大丈夫！と言うから大丈夫なんやろ・・・。」と思いつつ前回と同じように赤い塗り薬と漢方薬を手に電車に乗った。しかし今回は往復の時間と雑踏にひどく疲れを感じていた。

気だるさを覚えながら過ごしていた1週間後、急に高熱が出始めた。39.5度だった。平熱が低い私には耐えがたい高熱だった。2、3日じっと寝ていれば治るものと思っていたが一向に下がらなかった。しびれを切らした家内が発熱3日目の夕方、松本先生に電話をした。「近くの医者で抗生物質だけもらって、それ以外は服用せず、動けるようになれば診察に来るように。」と言われた。その夜、余りの高熱に耐えがたく抗生物質と一緒に処方された熱覚ましを服用した。そして少し楽になった数日後の10月の末、家内とともに高槻に向かった。

「抗生物質以外は飲んでないやろな！」松本先生はいきなり疑わし気な眼と詰問口調で問うた。「余りにもしんどかったので1回だけ飲みました。」と、私。「あほう！飲むなと言ったやろ。電話で言うたやろ！何で言うこと聞かんのや。あほう！」診察室のわれわれ2人に罵声が飛んだ。37度前後の熱が続いてい

た。血液検査をしてみるようになった。リンパ球の数値がかなり低く過度のストレスがかかっているようなことを言われたが心当たりはなかった。リンパ球の数値以外は正常でマダニに起因するようなものは何もなかった。免疫力を高めようとして処方された食前、食後の漢方薬だけを忠実に飲んだ。しかし微熱が続き、体がだるく、食欲もなく、気力も萎え、何もせず横になっている日々が続いた。

1週間後、再度血液検査をしてみるようになった。リンパ球の数値は戻りかけていたが今度はGOT、GPT、LDH、rGTPの数値が標準値より少し上がっていた。「少し肝臓が弱っている。様子を見よう。」と先生。漢方薬に抗ヘルペス剤が加わった。やがて続いていた微熱もほぼ平熱に戻り、普段の生活に戻りかけていたが気だるさだけは抜けきらなかった。「やっぱり年のせいだろうか？」通院が少し億劫になりかけたが、ボロクソに言われながら診察を受けると何故か元気を取り戻した。

師走に入った。私の表情を見ながら「まだやなあ。もう1度血液検査してみる。」何度目かの採血をした。検査結果が出るのは1週間後と聞いていたのに翌日の夕方、突然電話が入った。「こらっ！何かやったやろ！？」いきなりの怒り声だった。何のことを言われているのか全く分からなかった。おそる、おそる尋ねればGOT、GPT、LDH、rGTPの数値が異常に上がっているということだった。「とにかく明日来い！」すごい剣幕だった。

翌日の診察室で悪徳刑事のような尋問が続いた。私は無実を訴え続けた。「他の薬を飲んだやろ？サプリメントを飲んだのどちがうのか？おかしい！」いくら言われても心当たりはなかった。強いて言えば少し食欲が出てきて、牡蠣、しめ鯖、砂肝を連続して食していた。もちろん、アルコールは絶っていた。「入院して薬漬けになるのは嫌やろ。お前の体はお前が治せ！大丈夫や！」説得力があった。2週間後には年末から年始にかけて海外旅行の予定を入れていた。「良くならなければ諦めますわ。」「当たり前じゃ、あほう。おとなしく言うことを聞け！」怒鳴りつけながらも何とかキャンセルさせないようにという心遣いが言葉の端々に感じられた。抗ヘルペス剤と漢方薬を素直に服用し続けた。1週間毎の至急検査で数値は徐々に下がってきていた。出発の3日前、最終判断の至急検査結果が届いた。「行くな。やめとけ。死にたかったら行け！」旅行をやめ、のんびりと自宅で年末、年始を過ごした。倦怠感が消え、気力が戻ってきた。「もう少しで大丈夫や。」年明け早々の検査結果にホッとした。同じ薬の服用だけは続けた。

2月1日、最後の検査をした。夕方、結果確認照会の電話をかけた。「もう来んでもええ。バイバイや。入院なんかせんで良かったやろ。旅行で肝炎になってまた戻って来い！」大声で言いたい放題言って、先生が少し笑いながら忙しそうに電話を切った。「大丈夫！」と哲学者スピノザは言う。「へこたれさえしなければいい！」と作家アラン・シリトーは言う。現在の医学界にあって独立

不羈の精神で反権威・反権力を貫き通し、日本の医療の在り方を根源から問い質^{ただ}
 す^{きほく}気魄の医師に会えたことを心強く思っている。

血液検査数値推移表

(59歳、66歳の数値は手元に残っていた成人病検診時のもの)

			GOT	GPT	LDH	rGTP
			8~38	4~43	121~245	86以下
59歳	8月	2004	14	12		33
66歳	11月	2011	16	13	182	22
70歳	10.31	2016	39	75	258	36
	11.6		55	108	234	104
71歳	12.9		445	641	449	217
	12.11		278	524	331	215
	12.18		234	449	299	260
	12.28		50	109	176	151
	1.4	2017	41	60	192	100
	2.1		43	62	182	60

